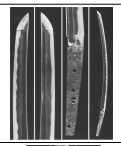
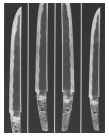
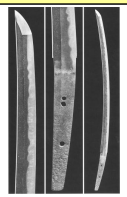
| 国／県 | 種別 | 名称 | よみ | 員数 | 所在地 | 指定等年月日 | 構造形式 | 法量 | 解説 | 写真 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 国 | 国宝（建造物） | 厳島神社（本社，摂社客神社，廻廊）<br>本社<br>本殿（附玉垣，不明門を含む）・幣殿・　拝殿（附左右内侍橋）1棟<br>祓殿（附高舞台，平舞台，左右楽房，左右門客神社本殿，棟札4枚）1棟<br>摂社客神社<br>本殿（附玉垣）・幣殿・拝殿1棟<br>祓殿1棟<br>廻廊（附棟札19枚）<br>東廻廊1棟<br>西廻廊1棟 | いつくしまじんじゃ | 6棟 | 廿日市市宮島町 | 明32.4.5<br>昭27. 3.29（国宝指定） | 本社本殿／桁行正面八間，背面九間，梁間四間，一重，両流造，檜皮（ひわだ）葺。（玉垣／右九間，左十一間）<br>本社幣殿／桁行一間，梁間一間，一重，両下造，檜皮葺<br>本社拝殿／桁行十間，梁間三間，一重，両端縋（すがる）破風付入母屋造，檜皮葺，背面両端庇間付。（左右内侍橋／各桁行一間，梁間一間，切妻造，檜皮葺）<br>本社祓殿／桁行六間，梁間三間，一重，入母屋造，妻入，背面拝殿屋根に接続，檜皮葺。（高舞台／高欄真々正面5.2m，側面6.4m。平舞台／553.1㎡。左右楽房／桁行五間，梁間二間，一重，切妻造，檜皮葺。 | | 平安時代末期（12世紀後半），平清盛によって現在とほぼ同じ規模の社殿が整備されたと言われる。海の神として瀬戸内に生きる人々の信仰を受け，現代も旧暦6月17日の管絃祭に多くの参詣客が集う。<br>現在の本社本殿は，戦国時代の元亀2年（1571）毛利氏によって建てられたが，本社幣殿（へいでん）・拝殿・祓殿（はらいでん）及び摂社（せっしゃ）客（まろうど）神社本殿・幣殿・拝殿は，鎌倉時代の仁治2年（1241）建築と伝えられている。また，東・西廻廊は永禄年間（1558～1569）から慶長年間（1596～1614）に整備された。<br>平安貴族の住宅であった寝殿造りを神社建築に移したとされ，本社と摂社客神社などの主要部と廻廊その他の建物で構成される。本殿の前に幣殿，拝殿，祓殿と順に連なた複雑な形態をしており，本社前面には広い平舞台と高舞台，左右門客（かどまろうど）神社などが附属している。廻廊は曲折して諸社殿をつなぎ，その柱間は延長107間（廻廊間数は108間）におよぶ。<br>社殿を含む境内地と彌山の原生林は，平成8年世界遺産に登録された。 | | 関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020） |
| 国 | 国宝（建造物） | 不動院金堂 | ふどういんこんどう | 1棟 | 広島市東区牛田新町 | 明33.4.7<br>昭33.2.8（国宝指定） | 桁行三間，梁間四間，一重，裳階付，入母屋造，こけら葺 | | 戦国時代建立の禅宗様建築。天井墨書から天文9年（1540）頃建立と推定されている。<br>大内義隆が周防（すおう）山口に建てた建物を安国寺恵瓊（あんこくじえけい）が安芸安国寺仏殿として移築したと伝えられる。現存する禅宗様の建築としては規模の大きい遺構であり，繊細な禅宗様の手法を用いながら，容姿には雄大な気風がうかがわれる，中世の本格的建物である。<br>不動院は，中世，安芸安国寺として安芸の守護大名・武田氏の信仰を得ていた。火災などで一時は堂塔の大半が失われたが，安国寺恵瓊が再建に尽力し，現存する建物の多くが恵瓊によって建てられたといわれる。江戸時代に禅宗から真言宗に変わり，寺号も宥珍（ゆうちん）が不動明王を奉じてきたので不動院と呼ばれるようになった。<br>※大内義隆（1507～1551）…防長（現在の山口県）を拠点とした守護大名。<br>※安国寺恵瓊（？～1600）…毛利氏の使僧。主に織田信長や豊臣秀吉との交渉にあたった。 | | |
| 国 | 国宝（建造物） | 明王院本堂 | みょうおういんほんどう | 1棟 | 福山市草戸町 | 明33.4.7<br>昭39.5.26（国宝指定） | 本堂　桁行五間，梁間五間，一重，入母屋造，向拝一間，本瓦葺<br>厨子　一間，春日厨子，板葺<br>棟札　3枚（元和七年九月　2枚，元禄第三年十二月　1枚） | | 奈良県の西大寺末の律宗（りっしゅう）寺院である旧常福寺の施設として，鎌倉時代の元応3年（1321）に建立された。和様（わよう）を基調とし細部に禅宗様（ぜんしゅうよう）と大仏様（だいぶつよう）を交えた折衷様（せっちゅうよう）の建築である。尾道市の浄土寺本堂とならび，瀬戸内海地域の現存最古の密教本堂のひとつである。<br>本尊・木造十一面観音菩薩立像（重要文化財）を納める厨子（ずし）は，鎌倉時代の春日（かすが）厨子と呼ばれる形態であり，扉内側に蓮の彩色画が描かれている。 | | |
| 国 | 国宝（建造物） | 浄土寺多宝塔 | じょうどじたほうとう | 1基 | 尾道市東久保町 | 明34.3.27<br>昭28.3.31（国宝指定） | 三間多宝塔，本瓦葺 | | 鎌倉時代末期，嘉暦3年（1328）建立。大日如来及び脇侍（わきじ）（尾道市重要文化財）を安置し，内部には彩色が施され，壁面には真言宗の名僧を描いた真言八祖像がある。<br>多宝塔としては，規模が大きい上に全体のつりあいがよく，高野山金剛三昧院や石山寺の多塔宝と並ぶすぐれた塔である。社丹・唐草に蝶の透かし彫りをした基股（かえるまた）など，華麗な装飾に富み，その整った容姿および手法によって，鎌倉時代末期の代表的な建築とされる。昭和11年の解体修理で，屋根の上の相輪（そうりん）の中から経巻など多くの納入品が発見された。 | | 関連施設：浄土寺宝物館（0848-37-2361） |
| 国 | 国宝（建造物） | 浄土寺本堂<br>附厨子1基<br>棟札2枚<br>浄土寺境内図2枚 | じょうどじほんどう | 1棟 | 尾道市東久保町 | 大2.4.14<br>昭28.3.31（国宝指定） | 桁行五間，梁間五間，一重，入母屋造，向背一間，本瓦葺<br>棟札　2枚（嘉暦二年四月十一日，正徳二年四月十一日各1枚） | | 浄土寺は，鎌倉時代末期（14世紀初め）に炎上したが，尾道の人々によって，数年後には再建された。<br>この本堂も尾道の人沙弥（しゃみ）道蓮（どうれん），比丘尼（びくに）道性（どうしょう）が発願して，鎌倉時代の嘉暦2年（1327）に大工藤原友国，同国貞により建築されたものである。前面二間通りを外陣とし，うしろを内陣とする密教式平面である。和様を基調としているが，桟唐戸（さんからど），花肘木（はなひじき），二斗などを用いたいわゆる折衷様式である。 | | 関連施設：浄土寺宝物館（0848-37-2361） |
| 国 | 国宝（建造物） | 向上寺三重塔 | こうじょうじさんじゅうのとう | 1基 | 尾道市瀬戸田町 | 大2.4.14<br>昭33.2.8（国宝指定） | 三間三重塔婆，本瓦葺，高さ19m | | 室町時代・永享4年（1432）建立の塔。信元・信昌を檀那として建立された。全体に和様を基調とするが，各重の垂木を扇垂木（おうぎたるき）とし，花頭窓（かとうまど）を入れるなど，細部にかなり濃厚に禅宗様の手法が取り入れられている。肘木鼻（ひじきばな）やすみ木持ち送りの彫刻なども巧みに作られ，尾垂木下絵様肘木（おだるきえようひじき）の先端は全部彫刻を施し，かつ彩色を施した絢爛（けんらん）豪華なものである。<br>向上寺は瀬戸田港北側，瀬戸田水道を一望できる小高い丘の上にある。室町時代（1333～1572）に始まる禅宗寺院で，小早川氏一族である生口氏と深い関係を持っていた。 | | |
| 国 | 国宝（建造物） | 明王院五重塔 | みょうおういんごじゅうのとう | 1基 | 福山市草戸町 | 大2.4.14<br>昭28.3.31（国宝指定） | 三間五重塔婆，本瓦葺 | 高さ29.14m | 南北朝時代の貞和4年（1348）住持頼秀のとき，一文勧進小資（いちもんかんじんしょうし）を積んで造られた五重塔。純粋の和様でよく整った外観と雄大な手法によって，南北朝時代を代表する建築の一つと言われている。<br>内部は一重目中央に壇が設けられ，心柱が二重目から立ち上がる特異な構造である。壇周囲の壁板に真言八祖行状図，四天柱には金剛界三十七尊，なげし天井などには，唐草文・花鳥・飛天などが描かれているが，当初の彩色をこれほどよく残した塔は他に類例がない。<br>なお，中世の港町・市場町の遺跡である草戸千軒町遺跡（くさどせんげんちょういせき）は，この明王院の東側山麓を流れる戸田川の中州にあった。 | | |
| 国 | 国宝（絵画） | 平家納経<br>法華経（開結共）　30巻<br>分別功徳品に平盛国法師功徳品に長寛二年平清盛薬王品に平盛信厳王品に長寛二年平重康の奥書がある<br>阿弥陀経　1巻<br>平清盛の奥書がある<br>般若心経（紺紙金字）　1巻<br>仁安二年平清盛書写の奥書がある<br>長寛二年平清盛願文　1巻<br>金銀荘雲竜文銅製経箱　1具<br>蒔絵唐櫃1合<br>慶長七年福島正則の寄進銘がある | へいけのうきょう | 1具 | 廿日市市宮島町 | 昭29.3.20<br>昭29.3.20（国宝指定） | | | 平安時代後期の長寛2年（1164）9月，平清盛をはじめ，子息重盛，弟経盛・教盛・頼盛など平家一門の人々が一巻ずつ結縁（けちえん）書写して厳島神社に奉納した経典群。<br>各巻とも金銀の優美な金具で飾られた表紙に，経の大意を描いた美しい見返し絵をつけ，料紙は表裏とも金銀の切りはくをまき，野毛あるいは，あし手を散らすなど意匠をこらしてある。また，水晶の軸に金銀の装飾金具をつけ，螺鈿（らでん）をするなど当時の工芸技法の粋をつくしている。平安時代（794～1191）に流行した装飾経の最高峰をなすものであり，大和絵（やまとえ）の史料としても貴重である。<br>※平清盛（1118～1181）…平安時代後期の政治家・武将。太政大臣。保元・平治の乱を勝ち抜き，平家政権を築く。 | | 関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020）<br>厳島神社宝物収蔵庫において定期的に一部を公開<br>平家納経及び金銀荘雲竜文銅製経箱レプリカは，宝物館で常時公開 |

| 国／県 | 種別 | 名称 | よみ | 員数 | 所在地 | 指定等年月日 | 構造形式 | 法量 | 解説 | 写真 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 国 | 国宝（絵画） | 絹本著色普賢延命像<br>画絹裏に「延命像仁平三年四月廿一日供養」の墨書がある | げんぼんちゃくしょくふげんえんみょうぞう | 1幅 | 尾道市西土堂町 | 昭42.6.15<br>昭43.4.25（名称変更）<br>昭50.6.12（国宝指定） | 二十臂像で四白象にのり各象首には四天王を頂く形式 | 縦146cm，横85cm | 平安時代後期の仁平3年（1153）の作。本品は二十臂（ぴ）延命像としては最古の作品であり，描写の上でも像の尊顔や二十臂をかたどるたゆみない朱線，強い彙（くま）とり，大ぶりな彩色文様に加えて，象頂の四天王に見られる力強い動きの表現など，鎌倉時代（1192～1332）に見られる画風に近い特色を持つ。時代様式の変遷を知るうえで貴重であり，他の作品の年代決定にあたって基準となる作品である。<br>※普賢延命…特に延命を功徳とする普賢菩薩像。腕が2本のもので，20本の腕を持つ二十臂延命像がある。 | | |
| 国 | 国宝（工芸品） | 小桜韋黄返威鎧（兜，大袖付） | こざくらかわきがえしおどしよろい | 1領 | 廿日市市宮島町 | 明32.8.1<br>昭26.6.9（国宝指定） | 一枚張筋伏せ | | この大鎧は，小札（こざね）の幅が著しく広く，威毛（おどしげ）も幅広く，胴も裾広がりで雄大である。一枚張鉢伏のいかめしい星兜と合わせて，総体に豪壮で古雅の趣がある。社伝に源為朝所用というが，染めの韋（かわ）の文様，金具まわりの形状あるいは文金物の手法，兜鉢の頂辺（てへん）の孔が大き（[849f](しころ)の杉立形の形状，大袖が六段あり水呑の緒環など古式で，平安時代末期（12世紀後半）をくだらぬ頃の製作と認められ，原形もよく保たれている。 | | 関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020） |
| 国 | 国宝（工芸品） | 紺糸威鎧（兜，大袖付） | こんいとおどしよろい | 1領 | 廿日市市宮島町 | 明32.8.1<br>昭26.6.9（国宝指定） | | | 形姿は雄大壮重で古雅な趣があり，原形をほとんど完存する。文安3年（1446）の宝物目録には平重盛寄進の鎧と記されている。鎧は，黒漆塗の鉄と革の平小札（ひらこざね）を一枚交ぜにし，厚手の紺糸で威（おど）している。前の裾は騎乗の際に馬背のあたりを和げるため，左右二間に割っある。兜は鉄黒漆塗り二十間張り，鍍銀（とぎん）の二方白（にほうしろ）十八間の厳星鉢で，[849f]（しころ）は五段下りの四段をゆるやかに吹き返している。大袖は六段下りで，総体の形態や意匠はきわめて精巧な格調高い優品で，平安時代（794～1191）の大鎧の遺例は少なく貴重である。 | | 関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020） |
| 国 | 国宝（工芸品） | 黒韋威胴丸（兜，大袖付） | くろかわおどしどうまる | 1領 | 廿日市市宮島町 | 明32.8.1<br>昭27.9.29（国宝指定） | | | 黒漆塗盛上げの鉄小札（てつこざね）と革小札を一枚交ぜとして，濃い藍染めの韋（かわ）をもって毛引威（けびきおどし）にしている。兜は，鉄黒漆塗二方白（にほうしろ）三十二間筋兜で，筋は黒漆で塗りこめ鍍金（ときん）の覆輪（ふくりん）をかけた総覆輪の兜である。黒漆塗地盛上げ小札の技法や牡丹獅子文染韋・筋兜の意匠から見て南北朝時代（1333～1392）をさかのぼるものではないが，現存の胴丸のうちでは古い形式の，保存がよく形姿が雄大で精巧を尽した作である。 | | 関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020） |
| 国 | 国宝（工芸品） | 彩絵檜扇（伝平氏奉納） | さいえひおうぎ | 1柄 | 廿日市市宮島町 | 明32.8.1<br>昭27.11.22（国宝指定） | | 縦29cm，横47cm | 糸まきのひのきの薄板（三十四橋）の表裏に胡粉（ごふん）の下地をほどこし，雲母（きら）を塗り，上に金銀の切箔（きりはく），野毛砂子（のけすなご）を散らし，濃厚な岩絵具を使って表には松の下に公達（きんだち），女房，女童（めわらべ）など三人の姿を，裏には紅梅の老樹咲く州浜に香炉と片輪車を描いてあるが，この両面の絵はともに「あしで文字」をまじえているところから，本来は歌意を表わしたものと思われる。本社古神宝類中の檜扇とともに，平安時代（794～1191）の檜扇としてまれな遺例で，あしで歌絵の資料としても貴重なものである。 | | 関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020） |
| 国 | 国宝（工芸品） | 金銅密教法具<br>金剛盤　1口<br>五鈷鈴　1口<br>独鈷杵　1口<br>三鈷杵　1口<br>五鈷杵　1口 | こんどうみっきょうほうぐ | 1具 | 廿日市市宮島町 | 明32.8.1<br>昭30.6.22（国宝指定） | | 盤／高さ6.2cm，縦21.8cm，横28.6cm<br>鈴／高さ20.9cm，口径9cm<br>独鈷杵／長さ18.5cm<br>三鈷杵／長さ18.8cm<br>五鈷杵／長さ19.4cm | 盤は，四葉形で盤の中央に鈴座をつけ，獅噛（しかみ）のある獣脚が力強い。鈴は，鈴体に胎蔵界四仏の種子（しゅじ）を鋳出した梵字五鈷鈴（ぼんじこれいじ）で，にぎりの中央に鬼面四箇をきざみ，鈷（こ）に獅噛をつけ，鈴体に宝相華文（ほうそうげもん）や独鈷杵（とっこしょ）・三鈷杵の帯をめぐらすなど装飾は複雑である。様式上鎌倉時代（1192～1332）の作とみられ，総じて重厚で密教法具の神秘的な厳しさをよく表わしている。また密教大壇の仏具として，杵・鈴・盤と当初のものを完存した点で珍しく，和様密教法具の最高峰をなす。 | | 関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020） |
| 国 | 国宝（工芸品） | 梨子地桐文螺鈿腰刀<br>中身に友成作と銘がある<br>附　蒔絵箱 | なしぢきりもんらでんこしがたな | 1口 | 廿日市市宮島町 | 明32.8.1<br>昭31.6.28（国宝指定） | 平造，庵棟 | 総長37.2cm，刃長20.3cm | 金梨子地（きんなしじ）に五七桐を青貝螺鈿（あおがいらでん）にし付描をしたもので，小品ながら製作がすぐれ，完存する南北朝時代（1333～1392）の合口拵腰刀（あいくちこしらえこしがたな）としての資料的価値は高い。中身は，平造，内反りの小振りの短刀で，庵棟，鎬えは小板目（こいため），刃文は細直刃でほとんど欠け出し，匂口（においぐち）うるむ。彫り物は表に巧みな素剣がある。目釘孔の下に「友成作」の三字銘がある。中身が傷んで完全でないのは惜しまれるが，平安時代（794～1191）の銘がある短刀はほとんど他に例がない。足利尊氏の所用という。 | | 関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020） |
| 国 | 国宝（工芸品） | 太刀（銘友成作） | たち | 1口 | 廿日市市宮島町 | 大3.4.17<br>昭27.11.22（国宝指定） | 鎬造，庵棟，鎬え小板目，刃文中直刃に小乱れ交じる | 刃長79.3cm，反り3cm | 平安時代（794～1191）の作。鎬造（しのぎづくり），庵棟（いおりむね），鎬えは小板目肌（こいためはだ），刃文は中直刃に小乱れがまじる。腰反り高く踏張りのある太刀姿である。<br>目釘孔（めぐぎこう）の上の平地に「友成作」の三字銘がある。古備前友成の作で，友成は平安時代中期（10世紀～11世紀）から鎌倉時代初期（12世紀末～13世紀前期）にかけて同名の刀工が数名あり，紀年銘があるものがないことからこの友成を最古のものとは決めがたいが，地刃の健全さの点から言ってこの上の作が存在せず，且つ作も優秀である。拵（こしらえ）はない。<br>平宗盛所用と伝えられる。 | | 関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020） |
| 国 | 国宝（工芸品） | 浅黄綾威鎧（兜，大袖付） | あさぎあやおどしよろい | 1領 | 廿日市市宮島町 | 大12.3.28<br>昭26.6.9（国宝指定） | | | 威（おどし）毛の浅黄綾と金物の鍍銀（とぎん）の色が反映しあって，端正な形姿に壮麗な趣を加えている。小札（こざね）は黒漆塗の精緻なもので，鉄と革札を一枚交ぜにして浅黄綾で威している。胴は裾搾りの傾向を示し，衝胴は五段に仕立て大袖の七段仕立とともに壮重感があり，「着長（きせなが）」の名に値する。細長の鍬形（くわがた）をさす兜においても，頂辺孔が小さく鉢の矧合（はぎあわせ）板の数は多くなり，吹返しを急角度に強く曲げている。保存もよく鎌倉時代中期（12世紀）の大鎧の典型的な遺品である。 | | 関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020） |

| 国／県 | 種別 | 名称 | よみ | 員数 | 所在地 | 指定等年月日 | 構造形式 | 法量 | 解説 | 写真 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 国 | 国宝（工芸品） | 厳島神社古神宝類<br>宝相華文螺鈿平塵飾太刀　1口<br>双鳳文螺鈿平塵飾太刀鞘　1口<br>半臂　1枚<br>附　紅地幸菱文綾残片<br>内衣　1枚<br>石帯　1条<br>平緒　1条<br>木笏　1握<br>檜扇　3握<br>飾太刀　1口<br>平胡〇　1口　〇はタケカンムリに禄（ひらやなぐい）<br>箭　11隻<br>朱塗飾太刀箱　1合<br>大宮佐伯景弘調進寿永二年三月廿日在銘<br>朱塗飾太刀箱　1合<br>中宮劫剣箱佐伯景弘調進寿永二年三月廿日在銘<br>松食鶴小唐櫃　1合<br>中宮佐伯景弘調進寿永二年三月廿日在銘 | いつくしまじんじゃこしんぽうるい | | 廿日市市宮島町 | 昭26.3.20<br>昭29.9.20（国宝指定） | | 飾太刀／64cm<br>半臂／身丈29cm<br>箭／18cm<br>内衣／身丈45cm<br>石帯／34cm<br>笏／34cm<br>檜扇／16cm<br>胡[84a2]／6cm | 飾太刀（かざりたち），半臂（はんぴ），内衣（ないえ），石帯，笏（しゃく），檜扇（ひおうぎ）などの小形調度類で，平安時代末期（12世紀）にたびたび御幸した後白河法皇（1127～1192）や高倉上皇が本社および客（まろうど）神社の神物として奉献したものの一部と考えられる。総じて小形ではあるが，宝相華（ほうそうげ）や鳳凰（ほうおう）の文様を螺鈿（らでん）でちりばめた華麗な飾太刀・蜂や鶴を配した柔らかな文様を織り出した大和錦（やまとにしき）の半臂，おおらかな公達（きんだち）の野遊びの景色を大和絵であらわした檜扇，松の小枝をくわえて飛びかう群鶴（ぐんかく）を蒔絵とした小唐櫃（こからびつ）などは，平安時代（794～1191）の貴族文化の典雅な趣をうかがうにたる類例の少ない遺品として注目される。 | | 関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020） |
| 国 | 国宝（工芸品） | 短刀　銘國光（名物會津新藤五） | たんとう（めいくにみつ（めいぶつあいづしんとうご）） | 1口 | 福山市西町 | 昭和26年(1951)6月9日 | | 刃長25.5　元幅2.4　元重0.6（cm） | 鎌倉時代（13～14世紀）の作品。<br>この短刀は新藤五国光の作中，第一の名作といわれ，地刃ともに沸の冴えが見事である。<br>銘字は「左字北冠」といわれ，国字が逆となり，光字の上半が北字に似る。<br>『享保名物帳』によると，名は蒲生氏郷が所持したことに由来する。孫の忠郷まで伝来したが，森川半弥という者に下賜した。それを前田利常が金百枚で買い求め，元禄十五年四月，将軍徳川吉綱が前田邸に臨んだ際に郷の刀とともに献上し，正宗，吉光を下賜されたという。鞘書に「智幻院様御指之内」とあり，徳川家宣の子で早世した家千代の守刀であったことが知られる。<br>（写真・解説は『国宝の刀剣　―秀吉，家康の愛刀など―』〔ふくやま美術館編，平成20年〕から引用） | | 関連施設：ふくやま美術館（084-932-2345） |
| 国 | 国宝（工芸品） | 太刀　銘筑州住左（江雪左文字）　附　打刀拵 | たち（めいちくしゅうじゅうさ（こうせつさもんじ）） | 1口 | 福山市西町 | 昭和26年(1951)6月9日 | | 刃長78.2　反り2.7　元幅3.2<br>先幅2.1　鋒長3.8　（cm） | 南北朝時代（14世紀）の作品。<br>九州筑前の地に「左」（左衛門三郎という）が出現するまで，九州鍛冶は匂口の冴えない作風であったが，左の出現により冴えた沸（にえ）出来の作風へと一変する。左の有銘正真太刀はこの江雪左文字ただ一口である。号の由来は小田原北条氏の臣・板部岡江雪齋（いたべおか　こうせつさい）が所持したことによる。<br>江雪はのちに豊臣秀吉のお伽衆となるので，おそらくこの太刀を献じたと思われるが定かではない。やがて徳川家康の有に帰し，末子の紀州徳川頼宣に与えた。頼宣はこれを帯びて大坂両度の陣に参加したという。以来同家第一の名刀として伝来した。拵は鮫鞘の打刀拵であり，目貫の抱茗荷の紋所は江雪ものであろうか。かなり古い拵である。<br>（写真・解説は『国宝の刀剣　―秀吉，家康の愛刀など―』〔ふくやま美術館編，平成20年〕から引用） |  | 関連施設：ふくやま美術館（084-932-2345） |
| 国 | 国宝（工芸品） | 太刀　銘正恒 | たち（めいまさつね） | 1口 | 福山市西町 | 昭和27年(1952)3月29日 | | 刃長77.6　反り2.6　元幅2.9<br>先幅1.6　鋒長2.5　（cm） | 平安時代（12世紀）の作品。<br>備前鍛冶の発生は古く，平安時代にはその存在が知られ，鎌倉時代に一文字派が成立する。それ以前の鍛冶を「古備前」と呼称して区別している。<br>この古備前正恒は太刀姿がいかにもよく，同工作中の傑作であるばかりでなく，同時代の代表作といえる作品である。阿波蜂須賀家に伝来した。<br>（写真・解説は『国宝の刀剣　―秀吉，家康の愛刀など―』〔ふくやま美術館編，平成20年〕から引用） | | 関連施設：ふくやま美術館（084-932-2345） |
| 国 | 国宝（工芸品） | 短刀　銘左　筑州住 | たんとう（めいさ／ちくしゅうじゅう） | 1口 | 福山市西町 | 昭和27年(1952)11月22日 | | 身長23.6　反り僅か　元幅2.3<br>茎長8.8　（cm） | 南北朝時代（14世紀）の作品。<br>この作は『光徳刀絵図』に「御物」とあり，すなわち太閤御物，豊臣秀吉が愛蔵したものであった。小振りな短刀であるが，左文字作中もっとも出来の良いものであり，同工の作風を遺憾なく発揮した傑作といえるものである。<br>（写真・解説は『国宝の刀剣　―秀吉，家康の愛刀など―』〔ふくやま美術館編，平成20年〕から引用） |  | 関連施設：ふくやま美術館（084-932-2345） |
| 国 | 国宝（工芸品） | 太刀　銘則房 | たち（めいのりふさ） | 1口 | 福山市西町 | 昭和28年(1953)3月31日 | | 身長77.3　反り3.2　元幅3.0強<br>先幅2.2　鋒長3.0強　茎長22.7　（cm） | 鎌倉時代（13世紀）の作品。<br>則房は一文字派の中でも片山の地に移った片山一文字といわれ，逆がかった丁子刃の作風をもって知られる。片山の地は同名が備前にも備中にもあり，古くは備中とされていたが，今は長船近くの片山といわれている。<br>この作は逆がかった華やかな丁子刃の作風を示した則房作中の代表作で，身幅のある堂々とした太刀姿に，肉置きが豊かで，板目肌の美しい鍛えである。<br>徳川将軍家に長く伝来したもので，将軍家には近衛家から献じられたともいわれている。<br>（写真・解説は『国宝の刀剣　―秀吉，家康の愛刀など―』〔ふくやま美術館編，平成20年〕から引用） | | 関連施設：ふくやま美術館（084-932-2345） |
| 国 | 国宝（工芸品） | 太刀　銘國宗 | たち（めいくにむね） | 1口 | 福山市西町 | 昭和28年(1953)11月14日 | | 身長72.7　反り2.5　元幅3.0<br>先幅2.2　鋒長3.9　茎長20.0（cm） | 鎌倉時代（13世紀）の作品。<br>国宗は通称を備前三郎といい，国真の三男と伝える。国宗はこの作のように華やかな丁子刃のものをもって典型作とするが，中には直刃（すぐは）調のもの，小丁子刃のものなどがあって，初二代説がとられる。中には「国宗　備前国住長船正和」銘の直刃のものがあって（東京国立博物館蔵），さらに研究を要するところである。<br>この作は華やかな国宗の作風を代表するもので，日光東照宮，鹿児島照国神社の国宗と並んで同工の最高傑作といえるものである。<br>（写真・解説は『国宝の刀剣　―秀吉，家康の愛刀など―』〔ふくやま美術館編，平成20年〕から引用） | | 関連施設：ふくやま美術館（084-932-2345） |

| 国／県 | 種別 | 名称 | よみ | 員数 | 所在地 | 指定等年月日 | 構造形式 | 法量 | 解説 | 写真 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 国 | 国宝（工芸品） | 太刀　銘吉房 | たち〈めいよしふさ〉 | 1口 | 福山市西町 | 昭和30年(1955)2月2日 | | 身長74.0　反り3.5　元幅3.2<br>先幅2.2　鋒長3.6　茎長21.0<br>（cm） | 鎬造、庵棟、身幅広く、重ね厚く、鋒猪首。腰反高く踏張りある太刀姿。鍛小板目肌約み、乱映りあざやかに立つ。刃文大丁子重花交じり華やかに、匂口締まり、足葉よく入り。腰もとの方沸ごころがある。帽子僅かに浅く乱込み、表裏ともほとんど焼詰めとなる。彫り物表裏棒樋を掻き流し、表に腰樋を掻き流して添える。茎生ぶ、先栗尻、反僅かにつく。鎬目筋違、目釘孔三、目釘孔の下棒樋と腰樋の間に小振りの二字銘。（以上，国指定文化財DB）<br>（以上，過去の広島県HP）<br>　福岡一文字吉房の作である。身幅が広く猪首鋒の堂々とした太刀で、鍛は福岡一文字によく見られるやや肌立つ小板目に映りがよく現れ、刃文も大房丁子や袋丁子などを交えた吉房の典型的なものである。鎌倉時代中期の一文字派最盛期における作風で、地刃健全である。<br><br>　鎌倉時代（13世紀）の作品。<br>備前一文字派の吉房は華やかな丁子刃の作風をもって知られる代表的な刀工である。それでも極端に華やかなもの，比較的地味なものなどがあり，銘にも大振り，小振りと異なる。<br>この作は吉房作中最も華やかな作風を示し，同工の典型作である。徳川将軍家に伝来した。<br>（写真・解説は『国宝の刀剣　―秀吉，家康の愛刀など―』〔ふくやま美術館編，平成20年〕から引用） |  | 関連施設：ふくやま美術館（084-932-2345） |
| 国 | 国宝（典籍） | 紺紙金字法華経　7巻<br>紺紙金字観普賢経　1巻（平清盛，頼盛合筆）<br>附　金銅経箱　1合 | こんしきんじほけきょう<br>こんしきんじかんふげんきょう | 1具 | 廿日市市宮島町 | 明32.8.1<br>昭29.3.20（国宝指定） | 紺紙金字，巻子装 | | 嘉応2年（1170）9月から承安2年（1172）4月，平頼盛が兄の清盛と結縁合志のもとに書写供養した経典。各巻のはじめ何行かを清盛が書き，後を弟頼盛が書きついだいわゆる両筆経である。もと10巻あったが巻四と無量寿経は古く社外に出，後者の断簡は「厳島切（いつくしまぎれ）」と称せられ流布している。各巻宝相華文（ほうそうげもん）の紺表紙で，見返しに金泥（きんでい）で釈迦説法図などを描いた当代金泥経の一典型である。 | | 関連施設：厳島神社宝物館（0829-44-2020） |